



# 慶應義塾と東南アジア

2017年は、日本・タイ修好130周年、日本・マレーシア外交関係樹立60周年という節目の年です。東南アジア各国は近年著しい経済成長を遂げており、世界からますます注目を集める存在となっています。義塾と東南アジアとの関わりの歴史は古く、現在では数多くの協定校や三田会を通じて年々交流が深まっています。東南アジアからの多数の留学生が義塾で学ぶと同時に、交換留学制度などを利用して、ASEAN（東南アジア諸国連合）各国の大学に留学する塾生も多くいます。今号では慶應義塾と東南アジアのつながりに目を向け、国際交流や共同研究などのさまざまな取り組みを紹介します。

慶應義塾と東南アジアとの関係は古い。そこからは、東南アジア諸国への理解を深め関係を構築しようとする義塾の姿勢をうかがい知ることができる。

1898～1922年にかけて塾長を務めた鎌田栄吉は、アジア諸国の独立戦士と交流があったようで、1901年にはフィリピンの独立活動家マリ・アノ・ポンセから自著の翻訳が寄贈されたほどであった。同年、幼稚舎にフィリピン人2名が入学、翌年にはタイ人が特別科に入学という記録もある。1926年には、鎌田自身、東南アジア5カ国を視察した。

戦時中には時流に乗る形で、1942年に語学研究所（62年より言語文化研究所）と附属の外国語学校を設立した。前者の設立には、日本の東南アジア研究を切り拓いた松本信廣が関わっていた。東南アジア関連語学書コレクションも充実したという。後者の開校時には、東南アジア言語としてはタイ語、マレー語が、翌年にビルマ語、ジャワ語が設置された。

1960年には、義塾創立100年記念行事の一環として「アジア教育者会議」を三田にて開催した。海外招聘者はすべてアジアからで、16名の招聘者のうち東南アジアからは6カ国8名と半分を占めていた。1983年、創立125年記念行事の際には、「アジアと日本」と題する国際シンポジウムを開催し、各国・各界を代表する人物を招いた。基調講演は、当時マレーシア首相であったマハティール（2004年名誉博士）が行った。

東南アジアに特化・関連した研究と教育を担った教員は、学部横断的に存在してきた。専門も歴史学、人類学、言語学、政治学と多岐にわたる。網羅的ではないが、文学部では先述の松本信廣、可児弘明、吉原和男、経済学部では倉沢愛子、太田淳、総合政策学部では梅垣理郎、野村亨、野中葉、言語文化研究所では川本邦衛、三上直光、鳴尾稔らがいる。なかでも、日本でいち早く地域研究を学部教育に取り入れた法学部政治学科では、1968年か

ら松本三郎が現代東南アジア論を担当した。当該科目は1994年より山本信人が引き継いでいる。

慶應義塾で学んだのちに祖国の発展に寄与した塾員は多い。その業績が評価され慶應義塾が名誉博士号を授与した塾員としては、ソンマイ・フンタラクーン（1974年、元タイ大蔵大臣）、タリサ・ワタナガセ（2007年、元タイ中央銀行総裁）などがある。

21世紀、世界経済の牽引役として東南アジアへの熱い視線が注がれている。東南アジア各地で活躍する塾員は数知れない。世紀をまたいで存在してきた義塾と東南アジアとの関係は、ますます発展することと期待する。



マレーシア元首相マハティール氏への名誉博士号授与の様子



## ベニアハウス

## 東北被災地からミャンマーへ

環境情報学部の小林博人研究会は、環境デザイン研究の一環として、ベニアハウスプロジェクトを推進しています。東南アジアのミャンマーとフィリピンでも、ベニア合板を使った建物を現地の人たちとの共同作業で造りました。

「デザインとは、考えをカタチにする行為です。都市でも、地方でも、海外でも、その地域・場所の環境や文化を学び、コミュニティの実態を確認し、それに基づいた柔らかい考えを、デザインという手法を用いてカタチとして提案します」(小林教授)

ベニアハウスの原型となるのは、東日本大震災後の2012年4月に、被災者の憩いの場として南三陸に建てたコミュニティハウスです。

「木材が豊富な宮城県の被災地域振興の意味を込めて、木材、それも間伐材を加工した比較的安価なベニア合板



ミャンマープロジェクトの様子。模型を用いて子供たちに工法を説明

を材料にしました。また震災後は、圧倒的に大工さんが不足していましたから、自分たちで造れるセルビルドの建物を設計し、研究会の学生が夜行バスで現地に通いながら地域のひとと一緒に建てました。続いて石巻の前網浜に地元漁師さんたちの集会所を造りました。ここではわかりやすい建設マニュアルを作成し、漁師さん自身に施工してもらうことにしました。自らの手を使って造った建物には愛着と誇りが生まれるもので、棚を増やしたり、まめ

にメンテナンスしたりと、地元の人たちに大切にされています」(小林教授)  
2013年のミャンマープロジェクトでは、パテイン市に近いマノヘリという村に、地域の人たちと一緒にラーニングセンターを造りました。きっかけは、アジア農村開発が専門で同じ環境情報学部のティースマイヤ教授からの依頼です。マノヘリでは3〜4カ月の長い雨期には農作業ができず、小さな家に大人も子供も閉じ込められ、家庭内暴力などが起こりがちです。そこで、子供を守るために、勉強しながら時間を過ごせる施設が必要でした。

清水信宏君(政策・メディア研究科後期博士課程3年)は、フィールドワークと施工、合わせて3度ミャンマーに滞在しました。

「ミャンマーは経済成長の真ただ中。旧首都のヤンゴンは行くたびに自動車が増え渋滞がひどくなりました。しかし現地の村ではインフラの整備が追いつかず、頻繁に停電し、ネット環境も不安定で、都市と田舎の大きなギャ



フィリピンでの保育園建設の様子

ツプを感じました。一方で田舎特有の穏やかな生活を人々は送っていました。

建物は雨期でも室内に水が入らないように、基礎を2m上げた高床式としました。プレカットした合板を組み立てるのですが、高床の上で組み立てて載せるとうまくいきません。荷重がかかるので床がたわむのです。試行錯誤の結果、直接基礎の上から組み立てました。作業は地元の職人さんと共同で行うのですが、その土地の環境に適したやり方などを教わり、なるほどと思うことが多くありました。異国、異文化のもとの共同作業を通じて、次々と起きる問題を解決するには、密なコミュニケーションが大切だ、と学びました」

## 作業の疲れをいやしてくれた 現地の明るい子供たち

2014年、フィリピンのボホール島で、保育園プロジェクトに参加したのは大泉真悠子君（取材時・環境情報学部4年）です。

「最初はイベントみたいで楽しかったのですが、何日もトンカチやドリルを使った作業を続けていると、疲れがたまりました。救いは、現地の人とだんだん仲良くなり気心が知れてくること。大工さんたちは、男子とはよく話していたのですが、女子には少し遠慮しているようでした。でも、奥さんたちがバナナを焼いた料理を差し入れてくれて、一緒に食べたことをきっかけに、徐々にコミュニケーションが良好になりました。また、毎日作業をのぞきにくる子供たちもかわいい。5分おきぐらいに声をかけてきて、器用な子はするすると屋根に上り、トンカチを使って手伝いをしてくれます。完成したときも達成感があったのですが、半年後にハウスで子供たちが楽しんでる様子が写真で送られてきたときには、なおさらうれしく感じました。その後、ネパールのプロジェクトにも参加しま

した。海外の人たちと力を合わせて仕事をすることの喜びを知りました」

その国の人と一緒にベニアハウスを建てるプロジェクトは、環境デザインを学ぶ学生にとって、価値ある経験となったことでしょう。

「これからも東南アジアは間違いなく発展していくでしょう。しかし先進国や開発途上国というくりには意味がありません。私たちは、それぞれの国の独自の文化を学びながら、現地の人とともに、新しい価値を創造する建築やライフスタイルをデザインしていくかなくってはなりません」（小林教授）



環境情報学部4年  
（取材時）  
大泉真悠子君  
おおいずままゆこ



政策・メディア研究科  
後期博士課程3年  
清水信宏君  
しみずのぶひろ



政策・メディア研究科  
教授  
小林博人  
こばやしひろと

## 留学生が語る、義塾での学びと生活

マレーシア出身のプア カイ君(理工学部機械工学科3年)と、タイ出身のセリーワッタナウート ラクサミー君(法学部法律学科4年)に、留学生生活について語ってもらいました。

——母国はどんな国ですか？

**カイ** マレーシアはマレー系、中国系、インド系、そして先住民民族系が共存する多民族国家。多様な宗教や生活様式が共存しているのが面白いし、好きです。私は仏教徒ですが、イスラム教徒の友達と食事に行くと、宗教的理由から同じものが食べられないこともありますけれど。



理工学部機械工学科3年

プア カイ君

法学部法律学科4年

セリーワッタナウート

ラクサミー君

**ラクサミー** 私は祖父母の代からタイに住む中国系のタイ人。住んでいる地域にも中国系の人が多く、タイの伝統的文化にはあまり詳しくありません。高校時代に受けた日本について知る授業で、1万円札の福澤諭吉先生に興味を持ちました。多様性を受け入れる柔軟な思想に惹かれて、義塾に留学しました。

——日本で暮らして感じたことは？

**カイ** 一番の驚きは銭湯。マレーシアではイスラム系が多く、肌を見せることを嫌い、男同士でも一緒にお風呂に入ることは考えられません。誘われて最初に行ったとき、日本人には羞恥心がないのか！と(笑)。その後、温泉には数回行きましたが、皆さんおおらか過ぎて、どうも落ち着きません。

**ラクサミー** 私は異文化に違和感を持たない方なので、合理的ならば、なるほど日本ではこうなんだと感じるだけです。ただ法学部生として、2015年に最高裁で夫婦別姓が認められなかったのは残念。タイは別姓ですし、専業主婦と

いう考えはなくて、働きながら普通の子供を育てています。そのあたりに保守的な日本を感じることもあります。

——義塾での学びについては？

**カイ** 先進的で学ぶ分野が多彩。今後、機械工学か流体シミュレーションかで迷っています。素晴らしいと感じたのは、自分でテーマを見つけて好きなことができる「機械工学創造演習」。友人とペアを組み、車型のロボットを作ってそれにスマホを載せてアプリ制御に挑戦し、プレゼンでみんなの意見を聞いたのもいい経験でした。矢上のロボットサークル、日吉のパソコンサークルに所属し、気の合う友人もできました。

**ラクサミー** 例えば「法理学演習」は、哲学的な深さがあり、知的好奇心が刺激されてワクワクします。啓発されていると感じることも多く、もっと学びたいと意欲がわきました。引き続き大学院に進むつもりです。先ほど日本は保守的と言いましたが、義塾では先生も塾生もまったくそんなことはなく、楽しく学んでいます。

## 日本留学フェア

日本留学フェアは、日本への留学を考えている外国人学生を対象としており、大学等の機関が現地向き、説明を行うイベントです。慶應義塾大学は2016年度、11カ国/地域において、計13回の日本留学フェアに参加しました。東南アジア圏ではインドネシア、タイ、ベトナム、マレーシアの各フェアでブースを設け、外国人学生に義塾の魅力を伝えました。



## Keio-NUS CUTEセンター

Keio-NUS CUTE (Connective Ubiquitous Technology for Embodiments) センターは、シンガポール政府インタラクティブ・デジタル・メディア研究開発プログラムオフィスからの招聘を受け、2008年にシンガポールに設立されました。同センターは、シンガポール国立大学 (National University of Singapore: 以下NUS) と慶應義塾大学の双方に設置され、両大学の研究者が共同で、ユビキタス社会におけるライフスタイル・メディアや、最先端ネットワークを活用したグローバルコンピューティング、アジアにおけるコンテンツおよびポップカルチャーのトレンドなどに関する研究を行っています。NUSはアジアでトップの評価を誇る大学で、慶應義塾大学とは大学間協定が結ばれています。義塾においては、大学院メディアデザイン研究科が中心となって同センターの研究の推進、運営を行っています。

## 東南アジア連合三田会

海外で勤務・生活する塾員にとって、義塾の卒業生組織である三田会は心強い存在となっています。東南アジア連合三田会は、バンコク、シンガポール、クアラルンプール、ジャカルタ、サイゴン（ホーチミン）、ハノイ、マニラ、プノンペン、ヤンゴン、ビエンチャンの地域三田会で組織されています。2016年11月にホーチミンで第5回東南アジア連合三田会が開催され、232名が一堂に会し、親睦を深めました。



## 慶應義塾大学SFC

### マレー・インドネシア語研究室

湘南藤沢キャンパス (SFC) では、マレー・インドネシア語の科目が開設されています。このコースは、「ベーシック」、「インテンシブ」、「スキル」の3つのレベルに分かれており、履修状況に応じて短期海外研修に参加することができます。基礎～中級レベルの「ベーシック」と「インテンシブ」は総合政策学部、環境情報学部、看護医療学部の学生が履修でき、上級レベルの「スキル」は習熟度によって他学部生も履修が可能です。

